

2013年度 文芸サークルすくりいべんてえす大学祭企画

参加型 1 行リレー

表紙および企画概要	……	1 ページ
第一作目（一日目）	……	2～4 ページ
第二作目（二日目）	……	5～7 ページ
参加者一覧等	……	8 ページ

本年度大学祭にて、文芸サークルすくりいべんてえすが実施した特別企画です。

屋内展示を見に来てくださった方に参加していただき、

一人一行ぐらいつ物語の続きを書き、リレー式で小説を作り上げました。

参加者の皆様、ご協力ありがとうございました。

完成作品をどうぞご覧ください。

参加型1行リレー 第一作目 (大学祭一日目)

1

その日、登校してきた僕は、くつ箱の中に一通の手紙を見つけた。

2

その手紙にはこう書かれていた。

3

『秘密の本をあなたへ』

4

最近はこのないたずらが流行っているのか……。そう思いながら好奇心に駆られ、その手紙を手にとった。

5

とりあえず奥にある上ぐつを取り出そうとしたのだが、そこにあっただのは見慣れた布製の

6

白ではなく、かすれた革製の茶色だった

7

それは、二〇〇ページにもわたる本だった。

8

僕はその本を開こうとし、背後に何者かの気配に気づいた。

9

「その本を開いちやダメだ！」

10

突然聞こえたその声色にはどことなく哀しげな感情が含まれていて、僕は思わず手を離し振り返った。そこには――

11

白くてふわふわなネコのぬいぐるみがいた。

12

ネコ!? しかもぬいぐるみ!? しゃべる?! ありえない!! けれど僕はそのぬいぐるみ

13

に見覚えがあることに気が付いた。あれは昔、

14

共働きの両親が、一人での留守番の間も寂しくないように、と僕に買ってくれたぬいぐるみだった。

15

ボクの一番の友達だった。

16

僕はネコのぬいぐるみがしゃべったかどうか確かめることにした。

17

「今、しゃべっただろ」

18

「うん」

19

ぬいぐるみは素直に答えた。哀しげな様子は変わらない。

20

「あれ!? 朝から疲れてるのかな?」

21

こうして現実逃避しようとした時、

22

「いやいや、逃げんなし、逃げんなし!!」

いきなりのキャラ崩壊だった。話を戻そう。

「で、なに？」

ぬいぐるみは少しせきばらいをして、静かに本を持ってこう言った。

「君は覚えていないだろうけど、この本は元々君のものだったんだ。

お母さんに見つからない様に君はうまく隠したつもりだろうけど、僕がわざわざ拾ってき
たよ。ざまあみろ」

事態に頭がついていかない。こいつは何がしたいんだ。まだ夢を見ている気分だ。無意味
でとびっきりの後味の悪い白昼夢……。

しかし、このまま放置しておくわけにはいかない。俺は行動を開始した。

事態を把握できたら「見て見ぬふり」はできないし、報・連・相を上手く活用したらと私
は思う。

僕、俺、私と自分でも定まりきってないアイデンティティを必死の思いで取り返した僕は、
報告・連絡・相談すべき相手について思いを巡らせる。

そんなの——この本を知っていて、ぬいぐるみがしゃべるのを当然と思い、僕と話せる
相手、そんなの、目の前のふわふわなコイツしか。僕はこいつに名前を付けた。確かコイツ
は……

「ひびき」——なぜって、なくときに耳に響くから。明日は雨か、響きがうるさくなると大
雨になるとか。君の心にも届くかも、ひびきのなき声が——

ボクの大好きな詩から取った名前、「ひびき」

僕はひびきにむけて日記をつけていた。そうだ、いつも……

『ねえ、ひびき、ママは僕のことを知らないのかな。そんなママは、僕だって知らない。い
らない。』

思い出した。僕が今手にしているこの本は、昔書いていた僕の日記だ。

失くしたものと思っていた。しかし、そうではなかった。現実から目を背けようとし、隠
し、忘れてしまったのだ。そう、思い出してしまった。

「この日記には君がすててきた思いが込められているんだ。それを持ったままでは、君はこ
こから進むことができないからね」

「けど、さっき、この日記を開いたらダメだって、言ったよな……」

僕はひびきを見る。響きは哀しげな瞳で僕を見ていた。

「お前の隠してきた願いが叶う」

ひびき——HIKIKIは確かにそう言った。

僕がひびきに言い聞かせていた。自分に言い聞かせていた。

本当に懂れていた、雨の日、稲妻の音にふるえる僕の頭を撫でてほしかった。

『お仕事がんばって』『一人で大丈夫』『遊園地なんて』『本を読むのが好き』

嘘だ。僕は嘘をついた。本当はオモチャより、ぬいぐるみより、ママに、パパに、一緒にいてほしかった。

僕の願いは、「二人と一緒にいたい」——いや、違う。僕はそうならない現実の方をむしろ憎んでいた。

この本を持ち続けることも、そして開くことも、今の僕にはできない、いや、してはいけない。

「僕は、この現実には復讐しなかったんだ。そして、そのためにここへ……」

ここから先へ進むには、僕は未練を捨てなくちゃいけない。

「どうすれば」「君はどうする?」今の君なら。考えるんだ。

ひびきの声に、僕は目を開けた。

「今の僕なら、ママやパパを傷つけるようなことを願ったりしない! さびしいのは、僕が二人を好きだからだ!」

次の瞬間、僕の手の中に入った日記から炎がふきだした。僕の未練をかき消すかのように、

日記は燃え上っていく。不思議と手に熱さは感じなかった。

手の中の炎が強くなるにつれ、周りの光景も眩しい橙色に染まっていく。本当に、この選択

で良かったのかはわからない。ただ、これだけは、確かなこととして言える。

過去に縛られず、今を生きることの大切さを。

ひびきはいつの間にか、橙色に飲み込まれていなくなっていた。橙色の次に僕が見たのは、心を洗われるような群青と陽光であった。

1 五月のある日曜日、兄である俺と弟は、リビングで作戦会議を開いていた。

2 そう、今日は母の日——だが俺たちはそのことをすっかり忘れており、急ぎよ何をプレゼントに送ろうか、今更話し合うことになったのである。

3 だが、父の情報提供により、母の欲しがっているものはリサーチ済みである。それは——
4 新品の靴である。確かに母はいつもは木潰した古いスニーカーを履いていた。

5 が、よく話し合ううちに、その提案は却下になった。以前母にどうしてそんなにぼろぼろ
6 になるまでそのスニーカーを履くのか、訊いたことがある。母はこう答えた。

「これはもう売ってないから」

7 そんな理由だった。なぜそんなにこだわるかは理解できなかった。でも、大切なのはわか
8 った。だから、普通にカーネーションを買うことにした。

9 俺と弟は近所にある小さな花屋に行った。そこで俺は重要なことに気付いてしまった。

10 そもそも、俺の言う母親とは実在するのだろうか。もしかしたら、妄想上の存在なのでは
11 ないだろうか。俺には、それがわからない。

12 「兄ちゃん、そういうこと口に出して言うの、恥ずかしいから止めてよ」

13 と、隣で弟が、この厨二めとさげすんだ目で俺を見ている。どうやら、考えていることを
14 言葉にできてしまったようだ。

15 そんなやりとりをはさみつつ、俺たちは母に送るカーネーションを選ぶことにした。

16 俺の好きなピンク色か、弟の好きな水色のカーネーションか……、そもそも水色のカーネ
17 ーションなんてあるのだろうか。

18 だが、そこで俺は冷静になって考えてみた。なぜ父親の情報提供は見当違いだったのか。
19 そもそも奴は俺の父親だったのか……。そこで弟は驚愕の事実を口にする。

「——気づいてしまったか、ここが仮想現実だということに。」

「仮想現実だったら、水色のカーネーションもあっていろいろになあ」

「にいちゃんさあ、そういう妄想恥ずかしくないの？」

「おっといけない。また口に出してしまった。」

「けど、父ちゃんは案外母ちゃんのことを分かってないんだなあ」
 弟は言った。色とりどりのカーネーションが飾ってある。母は何色が好きだったっけ。確か――。

「エメラルドグリーン……」

「シヨツキングピンク……」

弟と声が重なった。色は全く重なっていない。

「……」

「それじゃあ、エメラルドグリーンとシヨツキングピンク、両方のカーネーションを買うか」
 と俺は弟に提案し、弟も賛同した。

花を買って家に帰ると、リビングに父と母、そして見知らぬ女性が座っていた。

「二人ともちよつとそこに座ってくれ」

父が何かを覚悟したように、そしてどこか諦めた面持ちで行った。母はただただ、うなだれたまま、父の言葉を聞いていた。

突然、大きな音がした。目の前で、母が倒れている。

「……」

救急車を呼んで病院に行き、母はICUに入った。焦る俺たちとは対照的に、父と謎の女は冷静だった。医者と話す父を待つ俺たちに、女があるものを差し出した。

「これは貴方たちのお母さまのクレジットカードの使用記録よ。ちようど一週間前に五十万円の大金が使われた記録が残っているわ。貴方に何か心当たりはない？」

「それは私が使ったんだ」と医者と話していた父が言った。

もしかこの男、また己の趣味のために……。いや、それとこの女にどういう関係があるというのか。

話が読めない。だんだん混乱してきた。エメラルドグリーンとシヨツキングピンクが視界をぬりつぶした――これが母の能力 カーネーション **「絶望華」** !!

「ふふふ……。 カーネーション **「絶望華」** を使えるのがあなたの母親だけだとも思っているの？」
 突然、今まで沈黙を貫いていた女が口を開いた。

声に振り向けば、今度は極彩色の光を放つ女がそこにいた。

——が、そこへ漆黒の光波がふり注いだ。父の黒色の「絶望華」、クレジットカードの莫大な使用金額はこのためか！

クレジットカードが小刻みに震える。女は病室を埋め尽くす光を浴びながら母に手をのばした。

「そんな……、ありえない。これほどまでに利率が上がることがあるの!？」

これ以上力を使い続けるようなら、あなたまでICU（イメージナリー・カーネーション・ユニオン）に收容されることになるわよ!？」

「かまわない。我が後継者はすでに覚醒を始めている。すべての決着は私の息子がつけてくれるだろう」

父は淡々と述べた。

いつの間にか俺たちが後始末をつけることになっていた。俺たちの「絶望華」は俺たちだけのものだ。たとえ父であろうと利用することは許さない。俺が言おうとすると、弟が父のほうに一步踏み出した。

「もう争うのはやめよう」

そういつて、弟はスニーカーを取り出した。

すると、この場にいる全員の「絶望華」は収まり始めた。

——何故だ、何故弟が母の「在りし日の足跡」を使えるんだ!？」

その場に崩れ落ちた俺に、女はどこか満足した表情を浮かべた。

「やっぱり、お母さまの子どもなのね。ほら見て。笑ってるわ」

母から弟へと受け継がれた「在りし日の足跡」は、このとき誰も考えつかなかった一つの奇跡を引き起こした

「俺の……腕が……ッ!？」

母の「絶望華」、弟の「在りし日の足跡」、そして俺の「救済の万年筆」がぶつかり、ない混ぜになり、視界が白色に翻った。

三つの力が揃い、一つになり、我が家に伝えられし秘技「再来の宣託」が発現する。

父、母、弟、そして俺……。家族で過ごした記憶を、逝ってしまう母に……。

それが、俺たちの、母に対する最後のプレゼントとなった。

【完】

2013 年度 文芸サークルすくりいべんてえす大学祭企画

参加型 1 行リレー

実施日 2013 11/2(土)および 11/3(日) 広島大学大学祭 2013

企画担当 喜多正也 七原ハルコ

参加者一覧 【一日目】

(敬称略) 喜多正也 野分風 ブザー カピラ エイコ ゲン モカ みや ふわこ ナナハル ちとせ (匿名)
ニシ ミキナミ 世界三大珍獣 酒 真 かぐや姫 福富からの刺客 立川正典 廣瀬貴彰 坂藤崎余弦
榎本義和 麦の字 二打席五安打 長瀬学 ユージ・オダ おく太 虎谷将晴 天魔由多 1/2 沢直樹 ボンダンス
クォーター沢直樹 1/16 沢直樹 蒼井 半沢尚まにあわんもよう みじんこ★なお木 ざわざわ☆なお木 無沢なお
生レバー

【二日目】

HIBIKI 事熊様 初はすべてを見ている 坂藤崎余弦 あおほんA (匿名) 由月葵 軍曹 とある一平卒
ツヴァイ 右大左 パイルドライバー 進撃のオール楽天 クリサンセママ 調査 Hou★Ren★Sou GO
玉井詩織 檜垣俊介 金管楽器 オラ、ウーたん!! くろねこ 川野枝博 大竹 FA してかなしい 大瀬良に期待
大空 大陸 大海 バミューダ☆トライアングル squall.T.A 藤野樹海 駄犬 吉機代 ガ○ダム栄治 ふるー
部長 もう一人の部長 クラウド

たくさんの方に参加いただきました。ありがとうございました。

発行日 2013 年 11 月 28 日

編集人 喜多正也 七原ハルコ

URL/メール <http://scribentes.m22.coreserver.jp/>

hura_scribentes@yahoo.co.jp

(「すくりいべんてえす」で検索できます)

(感想・批評をお寄せ下さい)